会津藩のシンボル
鶴ヶ城天守閣再建への思い

難攻不落とうたわれた名城・鶴ヶ城は、戊辰戦争敗北の後に取り壊され、石垣と堀だけが残されました。しかし鶴ヶ城は、会津の人々の心を支えてきたシンボル――。そんな思いが市民を動かし、不可能とも言われた天守閣再建を昭和40年（1965）に果たしました。ここでは、会津若松市立会津図書館長の野口信一さんにお話を伺いながら、人々がどのような思いで幾多の困難を乗り越えたのか、そして「天守閣再建の志」が現代にどう息づいているのかを探り、時代を超えて伝えていくべき大切な心に思いを寄せてみました。

■市民の念願だった天守閣再建

城下町・会津若松のシンボルである鶴ヶ城は今でこそ当たり前の存在になっていますが、その姿を消していた長い時代がありました。

鶴ヶ城は、明治7年（1874）に取り壊しとなりました。このころは急速に西洋文化が取り入れられ、日本古来の文化は一文の価値もないように軽視された時代であり、加えて、新政府への不平士族の動きも活発で、政府は士族の反乱に神経をとがらせていました。特に旧会津藩士の精神的な支柱である鶴ヶ城の取り壊しは、政府の願うところだったのです。陸軍省の命で、天守閣をはじめ城内の建物は次々に取り壊され、天下に誇った名城鶴ヶ城も、石垣と堀だけを残して荒城と化したのです。

「再建を実現したのは、当時の市長・横山武をはじめ、多くの市民の熱い思いでした」と、野口さんは話します。太平洋戦争後の教育改革による新制中学校の校舎建設問題が持ち上がった際に、横山は財源不足を解決するため、本丸跡に福島県営会津競輪場を建設しようと考えました。それはまさに断腸の思いでの決断でした。鶴ヶ城は、文部省の史跡指定地であり、許可なくては一木一草も動かせませんでしたが、彼は、会津出身で当時参議院議長であった松平恒雄を説得し、「議長のツルの一声」で、昭和24年（1949）、のちに復元することを条件に建設の許可を得たのです。この時、横山は感激のあまり「本丸復元のあかつきには、松平家へのおわびと、白虎隊の霊を慰めるため、天守閣を再建いたします」と、議長に約束したのでした。

そして昭和32年（1957）、戊辰九十周年記念祭において天守閣の再建決議文が読み上げられ、広く会津地方の人々の参加によって決議された時、再建熱は急上昇していったのです。

再建が進む鶴ヶ城天守閣。完成を間近に控え、早くも見物の市民が訪れています（昭和40年）

当時の若松県令の命（写真・右）により、取り壊しが決定（明治7年）。石垣と堀のみが残された城跡は、取り壊し前の写真や城下絵図（写真・左：高瀬喜左右衛門氏蔵）などの資料を元に再建される日を待つこととなります

壁に弾痕が残る、取り壊し前の天守閣（当時の絵ハガキより。資料提供：福島県立博物館）

当時の市長・横山武（1906～1971）の像が、天守閣そばに建てられています。横山をはじめ多くの市民の熱意が、再建を実現しました

■厳しい中での決断と市民の協力

天守閣の再建は、会津に残されている数多くの古文書、文献資料などを後世に残すための博物館としての役割を担うとともに、観光都市・会津若松市の象徴として必要不可欠な事業でした。昭和39年（1964）には「鶴ヶ城天守閣再建期成会」が結成され、計画が練られていきました。まず設計は、和歌山城や小田原城を設計した東京工大の藤岡通夫教授に依頼しました。城跡は文部省指定の史跡であったため、これに手を加えるにあたって、「学問的に時代考証をした復元ならば許可する」「石垣などの遺跡を損傷しない」という国からの条件をクリアするため、取り壊し前の写真を参考としながら、4本の鉄柱で五層からなる天守閣を支え、石垣には負担をかけない工夫が施されました。また横山は、元県知事の石原幹市郎自治大臣に働きかけ、国の起債にもメドをつけました。市議会では再建への反対論も根強く、「財政が厳しい」「鉄筋コンクリートの天守閣はふさわしくない」といった声も相次ぎました。しかし横山の決意は固く、深夜に及ぶ攻防の末、再建はわずか1票差で議決されたのです。

残された問題は、再建にかかる巨費をどうするかでした。その多くを市民からの寄付でまかなう計画には当初不安もありましたが、それは杞憂に過ぎませんでした。「天守閣を待ち望む市民の心が、ここで一つになったのではないでしょうか」と、野口さんは話します。寄付は市民をはじめ全国各地から続々と集まり、集められた善意金は約七千百万円。市が予定していた寄付金額を大きく上回りました。そして翌40年の春には本体工事に着工。一層ごとに足場が高くなっていく姿に市民が心はずませる中、同年9月、ついに天守閣は完成したのです。

積み上げられた寄付金の帳簿が、市民からの善意金が相次いだことを物語っています

昭和39年9月、待望の起工式。ここに再建の第一歩が刻まれました

昭和40年9月、ついに天守閣が完成。喜びにわく人々が続々とつめかけ、さしもの広い本丸も、人の波で埋まりました

しゅん工式で、テープカットをする横山市長。そこには万感の思いがありました

■再建の大志を、未来へ

しゅん工式の日、羽織袴で式辞を読んだ横山は、中ほどまで来ると声を詰まらせ、やがて涙声となっていきました。永年の夢が結実した万感の思いに、人々は思わず静まりかえり、やがて深い感動が会場全体を包んでいきました。幾多の困難を乗り越えて実現した天守閣再建――。「この時代、横山市長をはじめとした多くの人々の熱意と行動がなければ、わたしたちが鶴ヶ城の姿を見ることはできませんでした」と、野口さんは話します。そして天守閣では、今日も郷土博物館として多くの貴重な資料が展示・保存されています。そこには、再建に尽くした人々の志が、脈々と受け継がれています。そして年間五十数万人の観光客が訪れる現在の姿は、「当時の人々の熱意と行動がいかに先見性があったか」を物語っているともいえるでしょう。

当時、天守閣再建は「復古調」との批判もありました。しかし横山は、再建を間近に控えた昭和39年12月にこう語っています。「歴史を省みず忘れ去ろうとすることは、先人の意志とはうらはらなものと考えます。むしろ二度とそうした過去の轍を踏まないように、また私共の象徴たる天守閣を現実に目で見、手に触れて往時を懐古し、そこに新しい精神思想、すなわち平和と繁栄の祈りの気持ちが胎動することを望むことこそ、大切ではないかと思うのであります」。――後年、世界的に有名な西ドイツ・ワイツゼッカー大統領演説の中で、同様の思想が語られていますが、それに先駆け、このようにスケールの大きな着想で再建がなされたことは、郷土の誇りといってよいでしょう。わたしたちは、輝かしい未来に向かって、時代の無限のつながりの中で生きている――。鶴ヶ城は、そんな熱い心を持ち続けることの大切さを、今も語りかけているのかもしれません。

野口さんは、「再建当時の人々の熱い思いがあったからこそ、現在の鶴ヶ城があるのです」と語ります

城内は、会津の貴重な古文書などを保存する博物館です